

ドクター内田のジャズ草花

~⑤~



昭和二十七年四月、ジーン・サートブームの導火線とクルーバ・トリオが来日した。戦後初めての本場ジャズメンで、「ナゴヤホットクラブ」がスタートして二カ月あった。

この公演は大変な話題を呼び、やがて起る「ジャズコ

ロのトリオに刺激を受けて翌十八年五月には「ジョージ川口とビッグフォー」が結成された。

分番組が毎週一回制作されることになり、僕らの活動を耳にした担当者から、その放送用原稿(スク립ト)を依頼された。当時はよほどジャズ

そして忘れもしない昭和二十八年十一月。とうとう名古屋にも超一級のジャズメンたちがやって来た。それも二つのグループが続いたからたまらない。ひとつは「ルイ・アームストロング・オールスターズ」で名古屋公会堂。今ひとつは、名宝劇場での「JATP」だ。どちらも初めて見聞きするスターたちで、信じられぬくらいのもうけだった。中でも「JATP」は、あのNHKの「スイングクラブ」で胸躍させたモダンジャズだから、小遣いははたいて昼夜二回を最前列で頑張った。時のたつのも忘れてしまう感激だった。

ルイ・アームストロング(右)とJATPの公演プログラム

二つの超一級グループ来名

を知ってる人が少なかったんだろねえ。

テーマがグレンミラーの「インサムード」というのはちよっぴり安易で不満だったんだが、内容だけはちゃんとしようと張り切って書いたものだ。もっとも一回分五千円というの、そのころの学生アルバイトとしては破格でびっくりにしてしまっただけのお金だったんだからね。

劇場だったから、まあ映画のアトラクションといった形だったが、白黒二人の外人サックス奏者を従えた彼女の「コジイセクステット」の演奏は、レコードでなじんでいた本物以上の迫力で、そのすごさに圧倒されてしまった。

僕はCBCの人たちと楽屋まで訪ねたものの何とも近寄りたがたい印象で、そっとお顔をみただけという情けないありさまだった。純情だったの

れ、日劇を取り囲んだフランスの熱狂ぶりは今も語り草だが、それも東京でのお話だった。

ちょうどそんなころ、名古屋で待望の本格的ジャズコンサートが開かれた。しかも出演はまだ知られていなかった秋吉敏子さん。ダンスも踊れぬ「ヒバップ」ひと筋だったから東京でもほとんど仕事に恵まれなかった彼女を招いた人は偉かったんだねえ。

今年、「自由の女神」にちなんで「リバイティ賞」を受けて、長年のジャズを賞して世界的貢献を高く評価された秋吉さんと親しくなるのは、それからずっと後のことになる。

(内田 修)